

東北アジアでの日ソ対立と日中戦争におけるソ連の宣伝工作、1920-1940年代を中心に

シェルゾッド・ムミノフ

1) はじめに

東北アジアの昭和初期の歴史はソ連と日本の対立が最高潮に達した時期に当たる。この関係は20世紀の最大の対立の一つであった。日ソ関係は多大な研究の蓄積があるが、ソ連の対日プロパガンダや宣伝工作の諸問題は更に研究する必要がある。本稿では、日ソ間の東北アジアでの緊迫した関係を、当時ソ連の宣伝工作を中心に研究したい。課題になるのは国内向けプロパガンダ政策のみならず、外国の聴衆に向けたものも含まれる。このプロパガンダの視点から、三つの問題を明らかにする。第一に、ソ連の指導者層が1930年代初期に直面したジレンマである。第二に、東方から強まっていた日本の脅威とソ連首脳部がそれに対して講じた政策や計画である。最後に、1930年代の両国関係や当時のプロパガンダの研究によって、第二次世界大戦後の両国関係における諸問題の戦前における核心を明らかにする。すなわち、ソビエト連邦建国以後20年間の日ソ関係をプロパガンダの視点から見るならば、今に至る諸問題までも明らかにできるだろう。上記三つの点うち、第一の点である当時のソ連国内の混乱については、多くの研究があるので、ここでは詳しい説明を省く。最初に当時のソ連の政治と社会の特質をいくつか挙げ、この中からプロパガンダに関係する点を指摘しておきたい。これにより、日中戦争期のソビエトのプロパガンダの構造を明らかにすることができる。

日中戦争の開始から1941年4月の日ソ中立条約調印までの期間に、ソビエトの反日プロパガンダが開始されていた？（報道された）ことをまず指摘しておきたい。これに関しては主に二つの要素が存在している。第一はイデオロギーである。「帝国主義者」であった日本は、当前のように他の資本主義国と同様に国内の報道ではソビエトを非難する立場であった。日本の反ソ的な立場は、歴史が激しい変化にさらされていたにもかかわらず、一貫した状態にあった。二つ目は、日本の「攻撃性」に対する反応である。つまり、ソビエトの東側の国境と東北アジアに対する関心という脅威である。この攻撃性は、特に1931年9月の満州事変と1937年7月の蘆溝橋事件、日中戦争が開始された1930年代の反日プロパガンダを増長させることになった。。もちろん他の要素もソ連のプロパガンダに影響を与えていたが、本稿ではこの2点を強調したい。

ソ連の対日宣伝、特に日本のアジア大陸での領土拡張行動に対するソ連のプロパガンダをどう分析すべきか。まず、この時期の両国関係の背景を簡単に概観する必要がある。本稿の第二節では日ソ間の最初の外交交渉をソ連外交文書に基づき見てみる。その上で、1920年代の後半にソ連が日本との不可侵条約を結ぼうとした再三の試み、そして満州事変直後の両国間の主な動きを簡潔に議論する。この動きの一つは、ロシア帝国が満州に建設し、1930年代当時はソ連によって管理されていた東清

鉄道を日本側が購入するにあたっての努力や交渉である。つまり、1930年代における日ソ関係の主要諸問題をソ連のプロパガンダを通して捉え、当時のソ連社会の日本や日中戦争への態度を考察したい。

この歴史を編年代で簡易に略述した後、次の第三節では、プロパガンダ問題の核心に入る。まず、ソ連社会の生活感情や世界観をよりよく理解するために、ソ連人の日常が映し出されている二つの主要紙の対日記事を読み、その上で、プラウダ（Pravda）やイズベスチヤ（Izvestiia）などの主要なソビエトの新聞の記事に基づいてソビエトのプロパガンダを分析する。次に、このプロパガンダが1939年8月の独ソ不可侵条約調印の前に海外におけるソビエトのイメージに及ぼした影響をみる。いくつかの例を提供するだけになるが、これらの例は既に発表済みの史料から厳選したものである。

ここでは、新聞記事だけではなく、初期ソビエト・ロシアで出版された図書やパンフレットも参考にした。これらの図書の主な目的は日本とその意向を読者のために説明し、ソ連の国益に逆らう日本の政策を批判することだった。ここで特に参考にしたのは以下の三つの図書であり、1925年から1939にかけての期間に出版されたものである。第一の本は『日本の帝国主義』で、日ソ関係史で最も重要な年、1925年に出版されました。第二の図書は1933年にロシア語で初版されて、翌年の1934年に英訳されてソ連以外でもよく読まれたものであり、タニンとヨハン（O. Tanin, E. Yohan）著作であった『日本の軍国主義とファシズム』である。¹この本は現在に至っても、日本の昭和初期の軍国主義化を捉える作品の中では洞察に満ちた図書である。本稿にとって最も重要なのは、当時の日本に関する一般ソ連人やソ連の共産主義者が感じる不平がこの本に見られることである。第三の本は1939年にソ連の軍事学出版社であったヴォエニズダト（Voenizdat）から出版された『中国人パイロットの手記』である。この本では当時日本軍と戦っていた中国国民党空軍のパイロットの日中戦争の回想録である。この三つの本によって、1920～1940年代のソ連社会における日本観を説明しておく、と、ソ連の対日プロパガンダの工作や内容をより深く理解できる。

2）1920～40年代の日ソ関係の概要

1917年のロシア革命からソ連の建国年だった1922にかけて、レーニンを始めソ連の首脳部は東方で昇る太陽、日本帝国の積極的な興隆を用心して見つめた。ロシア革命の翌年の1918年にシベリア出兵を決めて、三国協商を中心に欧米列強のソ連への干渉に参加した日本は、新興国家ソ連の社会や国民の憤慨を招いた。ソ連の東方での日本兵の展開は1920年のニコラエフスク事件をはじめ大きな衝突の発生をもたらした。この闘争は半世紀後までソ連人の記憶に残り、20世紀の後半まで両国の関係に影を落とし続けた。スターリンやフルシチョフのようなソ連の最高指導者にとって、資本主義国の干渉は史上唯一の社会主義の国であったソ連を、まだ揺りかごにいううちに握りつぶそうとするものであった。

¹ O. Tanin and E. Yohan, *Militarism and Fascism in Japan* (London: Martin Lawrence, 1934).

建国当初から周辺諸国の敵意に直面したソ連は、以降も資本主義の国が攻撃を再開するのを警戒していた。このため革命や内乱直後のソ連指導者は、早急にソ連の国力を増成する努力を強めた。

さらに、ソ連に干渉した国の中でも、日本はシベリアに最後まで残って、軍隊を 1922 年によく撤収した。しかも日本の軍隊はサハリン島の北部（樺太）に 1925 年まで残ったので、これを撤収させるのはソ連外交の最高目的の一つであった。サハリンから撤収した後でも、日本側は北サハリンをソ連から購入する可能性を探り続けた。一口に言えば、ソ連の最初期において、迫りくる東アジアの強国日本の脅威はソ連の東部に長い影を落としていた。

しかし、日本のシベリア出兵がもたらした問題にも関わらず、当時のソ連でも日本でも、友好関係樹立を目指した指導者がいなかったわけではない。外交関係を樹立して、相互依存に基づいた交流を作ろうとする試みを始めた最も重要な人物は後藤新平であった。当時東京市長だった後藤の努力や招待で、1923 年の夏に当時ソ連の在北京代表を務めていたアドルフ・ヨッフエは来日し、国交樹立をはじめ多くの問題を話し合った。この時期、新興国家のソ連は海外から出来る限りの支持を得ようとしていた。ソ連のこの立場の弱さは日本との交渉書類から窺われる。1924 年 5 月に日ソ国交交渉が北京で始まったが、その二ヶ月前にソ連の外相ゲオルギー・チチェリンが書いた覚え書きでソ連側の日本に対する立場が明らかになった。驚くことに、当時のソ連は北サハリンを日本に売る計画を完全に拒絶しなかった。チチェリンによれば、「サハリンの件では、日本側との唯一の食い違いはその値段であった。我々は 15 億ルーブルをあくまで要求していて、日本側が提供したのは 1 億 5 千万ルーブルだけだった。」² 言い換えれば、ソ連は樺太全体を日本に譲り渡すということが、起こり得る事態だと認めなければならなかったと言える。

チチェリンの覚え書きの題名は「ソ連の外交的承認やサハリン島での特許に関する日本側との交渉の件」であり、この文書にはソ連外務省は日本にソ連を外交上承認させる条件をまとめ、必要なら融和的姿勢をとってゆく可能性もあるとの考えも現れていた。1925 年に北京で日ソ基本条約が結ばれたが、ここに至った主な理由の一つは、ソ連側が日本に与えたサハリン島での石油と石炭採掘権とともに他の利権も提供したことであった。執着をますます強めていた日本に対するソ連のこの譲歩的姿勢は 1930 年代まで続いた。外交的承認を手に入れたソ連の外交官は、1925 年から 1935 年にかけて日本との不可侵条約や中立条約締結を目指し、そのために苦心惨憺した。駐日ソ連代表部のドヴァガレフスキー

（Dovgalevskii）とトロイアノフスキー（Troianovskii）は、1927～28 年に田中義一と数回会談を重ね、不可侵条約の話を何回もしたが、当時の日本ではそのような政治的意志はなかったためソ連外交官は労しても功なしだった。

² “О переговорах с Японией по вопросам признания Советского Союза и о Сахалинских концессиях,” Российский Государственный архив социально-политической истории (РГАСПИ), фонд 82, опись 2, дело 1383, лист 2.

外交的譲歩をしたソ連の初期の 10 年では、プロパガンダはどういった状態にあったか。1920 年代はソ連のプロパガンダの基礎的な段階であり、その基本原則が描き出された頃であったとも言えるだろう。言うまでもなく、プロパガンダ工作に対するソ連の取り扱いは特別であった。ソ連を「プロパガンダの国」と定義した歴史家のピーター・ケネズによれば、「他の国に比べれば、ソ連国家はプロパガンダに漲っていた。ボリシェヴィキ体制がプロパガンダ的目標設定をしていたのは当然だが、政治教育を通じて新社会で住み得る新しい人類を作ろうとした史上唯一の国だった。同じ目的を希望し計画した国の前例がなかった。どの国でも説得力を同じく大切にした首脳部がなかった。」³ 本稿ではこの宣伝工作の例を見てみる。特に、ソ連の対日プロパガンダの効果が明らかになる本や新聞を読めば、比較的教養のある読者層の中にあった、反日世界観を作ろうとする意志がわかる。

3) 新聞記事にみるソビエトの対日プロパガンダ

太平洋戦争中のソ日関係は（1941-45 年はソ連の大祖国戦争の時期とほぼ一致する）、1941 年の中立条約により、ほぼ休止状態にあった。とはいえ、1931 年の満州事変とノモンハン事件といったソ日国境における衝突は、不信を増大させ、互いを挑発し、さらに敵意を公にした出来事とすることができる。

本文で分析対象としている期間の初期に当たる時期は、ソ連の五カ年計画の最初の年であったが、特にウクライナやカザフスタンなどにおいて農業集団化と飢饉が発生した時期でもあった。この時期まで、ソ連外交は、外務大臣の経験があるマクシム・リトヴィノフ（ここはアルファベット表記は必要ないのか？）がリーダーシップを取っていて、彼の外交手腕は隣国と不可侵条約に調印し、国境の安全保障を確立することを目指していた。

1931 年 9 月に満州事変が起きた後の同年 12 月に、リトヴィノフは外相就任のため日本に帰国する直前の芳澤謙吉を朝食に招待した。これは日本と不可侵条約を調印するためのソ連の大きな試みだった。すでに見たように、このような日本への接近の試みはもっと前から行われていた。⁴

日本との不可侵条約に調印しようとするソ連の試みと、ソ連政府が同意しなければならない一定の譲歩は、満州事変から日中戦争が始まるまでの間に行うことが重要で、それはソ連がより強い立場で日本

³ Peter Kenez, *The Birth of the Propaganda State: Soviet Methods of Mass Mobilization, 1917-1929* (Cambridge: Cambridge University Press, 1985,) p. 4.

⁴ «Запись беседы Народного Комиссара Иностранных Дел СССР с Министром Иностранных Дел Японии Иосидзава,» *Документы Внешней Политики СССР*, том 14, 1 января-31 декабря 1931 г., документ №401, стр. 746-7486 Москва: Издательство политической литературы, 1968.

と接触するという意味を持っていた。また、ソ連が所有していた東清鉄道が 1935 年に日本へ強制的に売却されたことも影響を与えていた。鉄道の確実な運営はソ連政府の最大の関心事であった。

1931 年 9 月 19 日、広田弘毅大使との会談でカラハン外相は「東清鉄道の目と鼻の先で発生したこの出来事について我々は最大の関心を払っている」と発言した。そして、中立条約を結ぶための努力は具体的な成果をみなかったが、ソ連指導部は内部で最悪のシナリオを想定して議論を行っていた。

スターリンは満州事変の二か月後にヴォロシロフ国防相に宛てて、次のように書いていた。「日本は極東とおそらくモンゴルにまで手を伸ばすことはできないであろう」と。⁵モスクワからウィリアム・ブリット (William C. Bullitt) 大使が 1933 年 12 月に送ったレポートには、このソビエトの警鐘が過去 2 年のうちに高まったことを示している。ブリットは、リトヴィノフの発言を引用して「ソ連はその年の春、日本からの攻撃を想定して、西側の国境の安全を確保しなければならないと考えた」と書いている。⁶この評価を信じるならば、ソ連は日本を最大の敵と見ていたと言うことができる。

この警鐘は、ソ連国内のメディア報道によって証明できる。プラウダ (Pravda) を筆頭に、ソ連の新聞は、極東での日本の敵対行為と東清鉄道沿いの「挑発」について、定期的に報じた。ロシアの学者ユーリ・コステレフ (Yurii Kostylev) は、この緊張が高まっている時期に、ソビエト・プロパガンダの記事の言葉が、より表現豊かになり、日本人の描写に関してはより冷酷になっていったと主張している。⁷

様々な軽蔑的な言葉が、日露戦争中の人種差別的な表現を含めて、ロシアでは日本に関する記事に対して使われていたが、この期間には「サムライ」という言葉もソ連のプロパガンダに有効的に使われていた。コステレフ (Kostylev) は、サムライという言葉が階級的であり、その言葉自体が軍隊の階級を意味する言葉のようであり、そして攻撃的であり危険をはらんでいるという意味で使われていたと指摘している。敵のイメージを作り上げるために様々な意味を利用しようとしていることが分かるが、1930 年代に一番広く使われた言葉は「サムライ」であった。「サムライ」という言葉は、敵の階級を強調するだけでなく、彼らの先天的な積極性も強調しているため、プロパガンダの視点からより効果があったということが言える。

イデオロギーの要因が、この期間を通して新聞報道に色を付けていることは留意しておく必要がある。例えば、1933 年 12 月 10 日に発表された日本に関するプラウダの記事は、立憲政友会から松岡洋右が辞任したことを次のように書いています。「日本で最も反動的な組織と密接に関連している松岡が、軍

⁵ «И.В. Сталин – К.Е. Ворошилову», 27 ноября 1931 г., РГАСПИ ф. 74, оп. 2, д. 38, лл. 48-51, по сборнику *Советское руководство: переписка, 1928-1941*, под ред. Квашонкина, М., Росспен, 1999, стр. 161-163.

⁶ “Telegram No. 56 from Paris, dated December 24, 1933,” in *Russia, 1932-1933*, NARA, FDR-FDRPSF, National Archives Identifier 1668761, <https://catalog.archives.gov/id/16618761>.

⁷ Ю.С. Костылев, «Образ японца в советской массовой печати», *Политическая лингвистика*, Выпуск 1 (21), (Екатеринбург, 2007), с. 39-46.

事ファシスト集団の野望に影響を与えていることは間違いないし、その集団が彼をサポートし政治的な連合組織を形成しようとしている。」

このニュース記事からもわかるように、イデオロギー的要素は、伝統的なマルクス主義の修辞に従って、政治家の背後に立っている実際の「傀儡師（パペットマスター）」を暴露しようとする試みにおいて重要であった。例えば、上海から寄せられた日本の中国関与に関する 1934 年 3 月 5 日の一連のプラウダの記事では、「軍事産業の指導的立場にある三井三菱は、ファシスト政府が権力を掌握することを絶えず追求している。なぜなら、それによって疑いなく、軍事目的で配分される資金が増大しているからである。」⁸

イデオロギー的な要因は、対ソ戦略に当たっていた満州国の日本人と協力していた白系ロシア人を非難する新聞の記事にも表れていた。あるプラウダの記事では、「ハルビンの白人の警備員が（日本からの）気を引こうとしている」というタイトルをつけていた。その記事では白系ロシア人の複数の団体の代表者が[満州皇帝]溥儀の戴冠式に出席した、と書いていた。出席したのは、メレティ大司教、キスリツヒン將軍、ヴェルジビツキー（Verzhbitskii）、バクシエエフ（Baksheev）らであり、彼らはこの若い国家に敬意を表し忠誠を誓った人たちとして書かれていた。⁹

もう一つの主要なソ連の新聞であるイズベスチアは、東アジアの発展や日中戦争の戦場からのレポートを記事にしていた。記事の全体的な内容はプラウダの記事よりも敵対的ではないが、イズベスチアは直接的な表現を用いないものの、報道するニュースを恣意的に選ぶことによって間接的に読者層に影響を与える傾向があった。日中戦争を報じた際には、明らかに中国軍の回復力とその成功を強調した内容を優先的に扱っていた。記事が日本の軍事努力に関する内容だったときには、日本軍の失敗に最も関心が注がれていた。

1937 年 10 月 15 日の同じトピックに関する 2 つの記事を例にしてみよう。上海の前線における激戦についてのニュースでは、中国側が勝利し日本側が敗北したと書かれていた。例えば、一つ目の記事では「中国のゲリラ部隊の編成」というタイトルだったが、その記事では山西省北部にある原平近くで日本人が「深刻な敗北」をしたと書かれ、山西省で国民党軍が日本軍を脅威のもとに包囲して原平で戦利品を得たと報じられていた。同じトピックで、「東京は経済制裁に恐怖を抱えている」というニュース記事が発表されたが、それはロンドンの大手銀行が日本人との協力を止めることで日本が直面する可能性のある問題について書いていた。

4) 図書に現れたソ連の対日プロパガンダ

⁸ «Поход пушечных фабрикантов против Саито», *Правда*, 5 марта 1934 г.

⁹ «Харбинские белогвардейцы выслуживаются», *Правда*, 5 марта 1934 г.

本稿で対象としている期間に出版されたほとんどの図書では、ソ連の理論家たちは、中国本土における日本の資本家の恐ろしい侵略について書いていた。また、ソ連の出版社は、親中国のプロパガンダを翻訳していた。例えば、中国人のパイロットを評価した内容である。それらは赤軍兵士たちのライブラリーというシリーズで発行された。ここでは上記の二種の本の内容を見ていこう。

まずはソ連初期の対日プロパガンダが現れた『日本の帝国主義だが、すでに述べたように、この本が出版された 1925 年にソ連の対日外交は融和的、譲歩的であったが、国内読者層に向けたこの本の内容は日本に批判的である。プリボイ労働者出版会から出された『日本の帝国主義』の著者タニンとヨハンは、資本主義の国である日本がソ連の東部地区に迫ってくることに注意するよう呼びかけている。著者は当時の日本の東清鉄道に対する計画を理解して、こう述べている。「極東での最近の出来事を見てわかるのは、日本は真面目に東清鉄道を手に入れるよう努力している。この鉄道はずっと前から日本人の事業者が入手を切望していたものである。この事業者は以前から北満に足場を得ることを夢見ている。」¹⁰

同様に、タニンとヨハン著作の『日本の軍国主義とファシズム』も、満州国の自然資源を目指す日本の財閥や軍閥はいつかソ連の東部をも目指すと主張する。この本は三部からなり、明治維新以降を日本軍国主義やファシズムをマルクス主義に基づいて分析している。本稿の対象期間に関する分析は、「危機と戦争における反動的優位・偏見主義的ファシスト運動」とのタイトルをつけた第三部にあるが、ここで特に面白いのは日本の対ソ政策や計画である。それによれば、ソ連側がいくら不干渉の道を歩いても、日本の財閥、軍閥と政治家は日ソ戦争を避けられないものとみて、その戦争の準備をするだろう。その主な理由は、ソ連の中国に与える革命的影響である。一方では、ソ連側もこの影響をやむを得ず与え続けなければならない。何故なら、ソ連のこの革命的影響は「まさにその存在の結果である。」¹¹ しながら、ソ連の存在に関する特徴だけでは、この戦争への欲求を説明できないかもしれない。「ソ連の極東を獲得できれば、日本は日本海を内海にし、大陸で強い基礎を作って、将来起ころうとしている日米戦争に準備するために望ましい状態となる。」¹²つまり、拡大を目指す日本帝国主義者にとって、日ソ戦争と日米戦争はもう不可避のものである、とタニンとヨハンは述べている。

続いて『中国人パイロットの手記』に移って、イデオロギーの視点から戦場のプロパガンダを見てみよう。中国側の軍事的成功に重きを置き、日本軍の失敗をよく報じたイズベスチアの報道に似たものと同じアプローチが、中国国民党パイロットの手記集でも明らかである。日本人のパイロットとの空中戦で交戦した国民党軍のパイロットの立場から書かれたこの回想録や手記は、ロシア語訳されたものである。当時のソ連プロパガンダ刊行物に似合わず、この図書は誤植が沢山あり、良く編集されたものとはいえない。手記は一人称の観点から語られたものであるが、中国語の原典でしか内容の確実性を確認する方法がなさそうである。しかし、手記の多くには村落や街の地名があり、日本軍の将軍や指導者の名を挙げているの

¹⁰ В. Виленский-Сибиряков, *Японский империализм*, Ленинград, Рабочее изд-во «Прибой», 1925, стр. 126.

¹¹ Tanin & Yohan, *Militarism and Fascism in Japan*, p. 168.

¹² Ibid.

で、ある程度の信憑性があるかもしれない。表紙には翼に国民党の星をつけた戦闘機のイメージがあるこの本は、1939年にソ連の軍事関係の刊行物を専門するヴォエニズダト出版会から刊行された。

この手記集では、日本軍のパイロットの全員は臆病であり、不慣れな、優柔不断なパイロットも多いと描かれている。ほとんどの手記は中国軍の目覚ましい勝利に終わる。日本側は常に大損害を受け、日本の戦闘機はしばしば撃ち落とされる。止められる？逆に、中国国民党側のパイロットはほとんどの空中戦で勝利を得て、得意になって基地へ戻る。手記によく出てくるのは、大日本帝国海軍の九六式陸上攻撃機である。この戦闘機は中国人パイロットによってよく撃ち落とされる機であった。

戦いは中国人パイロットに悪条件であっても、彼らはいつも努力して、最終的には問題を乗り越えることができる。「ヒューマン・ターゲット」との題名の手記では、筆者は中国側の戦闘機8機と日本軍の戦闘機27機の戦いを描いている。この戦いでは筆者の戦闘機は撃ち落とされ、彼自身は日本人パイロットのヒューマン・ターゲットになる。筆者は作戦で敵を混乱させた戦友によって助けられた。はっきりとは言われていないが、手記からはこの戦いは中国側の大敗であったことがよく理解できる。

日本人との戦闘は空中戦だけではない。例えば、空中でぶつかり合った戦闘機から放り出された二人のパイロットのエピソードがある。この二人は落下傘降下する時に撃ち合い、着地した後も殴り合った。肩に負傷した中国人のパイロットはこの殴り合いで負けたはずだが、彼は殴り合いを聞いて走ってきた中国人の農民に救われる。二人の農民は日本人のパイロットを殺し、救われた中国人のパイロットを村へ連れて行く。彼らはパイロットを村の鍛冶屋に隠して、大事にする。このエピソードを通じて見られるのは、この本の中心メッセージであり、抗日戦は中国の全国民の戦いであるということである。中国人は全員この戦いに参加した、というメッセージでもあった。

負傷したパイロットは傷が癒えるまで鍛冶屋に残り、体力を取り戻す。ゲリラ隊員の農民は彼を訪れ、戦場の話を伝える。その中には中国軍の勝利についての良い知らせがある。中国人に潰された日本の軽騎兵隊、黄浦江で中国軍に負けて、沈んだ四隻の日本の船、殺された八十人の日本人の兵隊。いうまでもなく、凶報もあって、このほとんどは日本軍の残虐を伝えていた。パイロットが聞いた話のなかでは、日本軍が炎上させた中国人の村、報復行為の被害者になった民間人などの話がある。幾ばくもなく、彼らがいた村も日本軍に囲まれ、ゲリラは村の人々に森へ脱出するよう言い聞かせる。しかし、民間人だから日本軍には危害は加えられないと言った人もいて、村に残った。間もなく村から射撃の音が聞こえる。ゲリラ隊員の一人が村へ戻って、農民の一人を連れて来る。この農民は、迫ってきた日本軍は村の小屋全部を燃やし、逃げようとした全員を殺した、という。殺された人の中には農民の家族もいた。ショックを受けた農民は、「彼らは人間じゃない！人間じゃない！」と叫んだ。

当時日本を扱ったほとんどのロシア語プロパガンダ刊行物と同じく、この本も「サムライ」という言葉をよく使う。この言葉の他にも、「殺人鬼」、「日本猿」、「日本の蛮夷」という軽蔑的な言葉も見られる。

『中国人パイロットの手記』は1930年代のソ連宣伝工作について何を明らかにするのか。ソ連のプロパガンダにとって、この本には二つの価値があった。第一に、この手記は日本や日本人を、彼らの行為の被害者の観点から描いていた。手記を書いた中国人の被害者のパイロットや民間人が語ったものは信頼できるものである。読者にとって、中国のこの英雄たちは、たとえ戦闘で負けても、精神的に勝利していた。こういう観点を通じて、日本の攻撃性、その残忍性、そして下劣性をソ連人の読者層に伝え、反日的観点をソ連人のなかで深めることができた。つまり、中国人を媒介として使い、日本人に直接会ったことがないソ連人の読者に反日のメッセージを伝えるのは、ソ連のプロパガンダにとって効果的であった。このプロパガンダによって、大日本帝国はアジア人に害を加える第一の加害者として描かれた。そのうえ、中国人の憤慨や怒りを伝える必要から、手記の中には悪態や人種差別的言葉をも含むものもあった。「日本猿」という言葉はその例である。このような表現の目的は、日本人に対して本能的な反感を抱かせるためであったと言えるだろう。

第二に、一方で、語られた手記がすべて被害者の観点からというわけではなく、勇敢なパイロットの生死を懸けた戦いの物語であったことは、日本人の性格上の特徴を辛辣に強調する便利な方法であった。辛辣に描かれた特徴の中には日本人の卑怯さ、ビクビクする臆病さなどがある。こうして、ソ連読者に提供された中国人の手記の中で、日本人は人道に外れた侵略者の役を受ける。この侵略者は人々の小屋を全焼させ、罪なき民間人を殺した者でもあった。そして大抵の場合は、この加害者は中国の勇敢な戦士によって惨敗を喫した。

5) ソ連宣伝の海外での成功

この時期のソビエト・プロパガンダは、国内外の消費のためだった。外国に向けた宣伝に使われた言語や方法は、ソビエト・プロパガンダの全体の特徴であった。ソ連は搾取された中国の大衆の擁護者として描写され、他方で日本は本土の人々と資源を搾取する帝国主義の力として書かれた。興味深いことに、西側諸国の広範な反共産主義にもかかわらず、多くの要因について、このプロパガンダは、ソ連を日本の侵略に対する防波堤として描写することに成功した。私はここで、ソ連を日独反対の利益のための重要な力として見ていた英国の政治家の一例を紹介したいと思う。その政治家の名前はフレデリック・エルウィン・ジョーンズ（Frederick Elwyn-Jones）です。

20世紀イギリスの高名の政治家であったフレデリック・エルウィン・ジョーンズは、1938年に出版された「平和の戦い」という本の中で、ナチドイツやファシスト・イタリアに対立するソ連についてこう述べている：「ソ連の外交の基礎は平和への誠の希望である。ソビエト・ロシアは他国の地域をむやみに欲しがらない。逆

に、ソ連国民が現在願ってるのは平和である。国民が確立した新経済制度を、ソ連の可能な限りの広域で強化していくことであろう。」

エルウィン・ジョーンズは日中戦争でソ連が演じる役割について、こう述べている：「ソビエト・ロシアは中国国民に軍用機を送った。当時、ロシアが占領するトルキスタンから中国西部の甘粛省に架ける素晴らしい道路を使って、トラックがソ連製の軍需品を中国軍隊に運んでいる。」

しかし、ソ連の重要な役割は中国に軍需品を供給することに限らない、とエルウィン・ジョーンズは考えており、ソ連軍の戦略的使命について次のように述べている：「あの恐るべき極東軍を満州国の辺境に配備したソ連は、アジア大陸での日本軍隊の半分ぐらいを無力化させる。これはソビエト・ロシアの立派な戦略であり、侵略者に意を決して向かって、制止する戦略の最たるものである。」¹³

エルウィン・ジョーンズは英国労働党の議員でありましたが、ソ連に同情的ではありませんでした。むしろ、下院議員を何年も務めたエルウィン・ジョーンズは、一代貴族の称号を受けて、男爵エルウィン・ジョーンズになっていました。言い換えれば、ソ連のプロパガンダによって支配階級やサークルを代表したエルウィン・ジョーンズによって、1930年代のソ連のこんなに激賞した評価は実に注目すべきものであろう。あるいはこの評価をもソ連の宣伝の成功の一つだと言えるだろう。

6) 終わりに

このプロパガンダのすべては、ソ連の共鳴者の多くが裏切りと見なした、いわゆるモロトフ・リッベントロップ協定に署名したことで、1939年に信頼性を失いました。協定はソ連軍が日本の軍隊とノモンハンで戦っていた時に結ばれました。それはちょうどソ連軍が日本の第六軍を倒した時でした。このソビエトの勝利は、日本の立場に変化をもたらしました。

しかし、モロトフ・リッベントロップ協定に続くソビエトの意図についての西側の懐疑論はあまりなかった。。ナチス・ドイツが1941年6月にソ連を侵略したとき、ソ連は再び反ヒトラー連合の重要な味方となったからである。この連合の勝利とソ連が共に勝利を得るために被った犠牲は、ソビエトのプロパガンダ主義者に、ソ連が平和主義者であり国際主義者であるという資格を得るための努力をさらに増大させていきました。冷戦の最初の緊張まで続く、この蜜月時代ともいえる期間は、英国、米国、およびその他の連合国において、ソ連が数多くの友好的な力として描かれていたことを意味しました。

¹³ F. Elwyn-Jones, *The Battle for Peace* (London: Victor Gollancz Ltd, 1938), pp. 325, 328.